

ノーモア・ヒバクシャ通信 第28号

発行 2016年4月30日

ホームページ <http://www.kiokuisan.jp/>
継承ブログ <http://keishoblog.com/>
フェイスブック <https://www.facebook.com/kiokuisan>

発行者 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085

東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F

Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)

Email hironaga8689@gmail.com

郵便振替口座 00170-5-694752

(口座名義) ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産基金

★もくじ

I. 第4回通常総会のご案内	P 1
II. 部会、作業グループの取り組みから	
1. 資料庫部会	P 2
2. 継承交流部会	
(1) 被爆者運動から学び合う学習懇談会	P 3
(2) 被爆70年「被爆者として言い残したいこと」調査	P 4
3. 広報電子化部会	
(1) 「継承活動に取り組む人々をつなぐプロジェクト (仮)」実施について	P 5
4. 組織財政部会	
(1) クラウドファンディングの取り組みのご報告	P 6
III. 各地の取り組み、関連企画から	
(1) 【埼玉】被爆体験の継承の取り組みから	P 7
(2) 【東京】国際協力やキリスト教関係のグループと新たなつながり ～早稲田奉仕園で世界ヒバクシャ展～	P 8
(3) 12/19「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」での川崎哲さんの講演 (要旨)のご紹介	P 9

I. 第4回通常総会のご案内

平素より当会の運営にご参加、ご協力をいただきありがとうございます。広島、長崎に原爆が投下されてから71年目に入り、原爆体験の記憶を受け継ぐ取り組みを一層強めていかななくてはなりません。今総会では、「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産の継承センター」設立構想の進捗状況について、この間取り組んできたクラウドファンディングの達成状況とこれからの課題（「デジタル・アーカイブ化」の取り組み）について報告します。また、この会が日本被団協とともに取り組んできた、被爆70年「被爆者として言い残したいこと」調査については、中間報告のまとめと並行して追加調査を行うこととし、その取り組み方向を提起します。一年間の取り組みを振り返るとともに、新たな事業計画を協議するために、第4回通常総会を下記の要領で開催します。

詳しくは同梱の「特定非営利活動法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

第4回通常総会のご案内」をご覧ください。会場案内図は末尾をご覧ください。

記

第4回通常総会

1. 日 時 2016年5月28日(土) 午後1時～3時半

1. 場 所 東京四谷主婦会館プラザエフ 5階会議室
東京都千代田区六番町15 TEL03-5216-7757

1. 議 題

(審議事項)

第1号議案 2015年度事業報告(案)の承認の件

第2号議案 2015年度決算(案)の承認の件

(報告事項)

1. 2016年度事業計画

2. 2016年度予算

(※ 定款により、事業報告・決算は総会議決事項、事業計画・予算は理事会議決事項です。)

II. 部会、作業グループの取り組みから

1. 資料庫部会

南浦和の資料室(コーププラザ浦和4階)では、寄贈された書籍・冊子類の目録作成作業が、毎週火曜日に行われています。

これまでに、①体験記・手記類(各県・地域の被爆者団体、個人、その他の諸団体によるもの)、証言誌、②原爆文学(詩歌、小説・エッセイ・評論など)、芸術(写真、絵画、音楽、映画、演劇など)分野の入力が終わり、③調査研究、④核兵器&原水禁運動分野の整理にとりかかっています。

また、東京の被爆教師であった故・永坂昭さんのご遺族から、手記・聞き書きや平和教育、東京の被爆者運動関係の書籍等をご寄贈いただきました。

日本被団協が所蔵している書籍・冊子類については、5月中には事務所の条件を整えて目録どりを始める予定です。

なお、各都道府県、地域の被爆者の会が独自に作成した会報や運動資料についても、被団協総会に向けて方針を具体化し、順次収集・整理していきたいと考えています。

2. 継承交流部会

(1) 被爆者運動から学び合う学習懇談会

① シリーズ2「被爆者問題をみつめる」

シリーズ2回目の学習懇談会は3月19日(土)、山手茂さん(茨城大学および新潟医療福祉大学名誉教授、保健医療社会学)をお招きして、「被爆者問題をみつめる」をテーマにプラザエフの5階会議室で開きました。

1954年に広島女子短大に赴任された山手先生は、原水爆禁止運動や被爆者運動のごく初期から、社会学者として広島における被爆者調査・研究に参画してこられました。そんな山手先生が問題提起をされるとあって、若手の研究者を含む34名で会場はいっぱいになりました。

自らの戦争やヒロシマとの関わりに始まり当時書かれた多くの論文を紹介されながらのお話では、実態調査にもとづく小さなパンフレットが国会請願や制度の改正に役立ったこと、原水禁運動が分裂する困難のなかでみんなが一致できる目標として『原爆被害の特質と「被爆者援護法」の要求』(通称「つるパンフ」)が作成されたこと、そのパンフが医療面だけでなく生活全般に及ぶ複合的な原爆被害の特質と「原爆症と貧困の悪循環」を解明し、特別措置法の制定を促したこと、などが明らかにされました。

山手先生の、戦争体験全体のなかで原爆を考える—被爆体験と戦争体験の交流を、被爆者問題はどこまで理解されているか—「知っている」ことと「理解している」こととは全く別、というお話は、参加者から今こそ重要な指摘として受け止められました。

② シリーズ3「原爆は人間として受忍できない

＝被爆40年“原爆被害者調査”ストーリー＝

第3回目の学習懇談会は4月23日(土)、立教大学池袋キャンパスの教室で開催されました。日本被団協が被爆40年目に全国47都道府県で行った「原爆被害者調査」をテーマに、専門家としてこの調査の企画・分析にあたられた濱谷正晴さん(一橋大学名誉教授)から問題提起をしていただきました。

85年調査の背景には、基本懇の打ち出した原爆被害「受忍論」(1980)があり、調査の目的は、これと「原爆被害者の基本要件」(1984)との争点＝原爆被害が人間として「受忍」しうるものなのかどうか＝に事実で決着をつけることにおかれまして。そのために、既存の諸調査の経験や企画部会での討議、代表者会議等でのパイロット調査を重ねながら、苦悩としての原爆体験にあえて分け入っていく調査票(28頁)がつくられていきました。濱谷さんは、個々の被害事実が(そのままではなく)「つらかったこと」と自覚されてはじめて、〈生きる意欲の喪失〉に、また、〈生きる支え〉がその貫徹をゆるさない抵抗につながることをおさえて、調査票が完成されていく過程を明らかにしました。

1万3千人余りというかつてない規模で行われた調査の結果は、被団協によって4冊の証言集をはじめ調査報告書、パンフレットなどにまとめられましたが、その後も石田、濱

谷両氏によって分析作業がつづけられました。「地獄の復元—『あの日の証言』分析ノート—」「被爆者の死と生—〈原爆〉の反人間性—」などを著し1500余表の統計集を完成させた故・石田忠先生（一橋大学名誉教授）の証言と統計分析のエッセンスは、生前の講演映像で紹介されました。

「これだけの犠牲、死者に対する戦争責任者の責任はどうなっているのか。被爆者（被爆死した者）として、責任の追及をつづけたい。私は援護法の制定をまず第一に努力したい」。それがあの日助けることのできなかつた死者に対する、自分のせめてもの慰霊、鎮魂なんだ、と語る被爆者たちの証言を紹介しながら、「私たちがこうなったのは、国が戦争をやったから。だから国はその責任にもとづいて補償してほしい、というのが国家補償だ。国の戦争責任が確立されると、戦争をやった場合には政治指導者の責任が問われることになる。憲法9条が実質的に生きてきて、日本の政治家は戦争ができなくなる…。憲法9条を変え、戦争を想定する人たちにとっては、国の戦争責任を認めると法律で定めることは不可能。原爆被爆者に対する対策をみていくと、わが国の統治者が戦争をどう考えているかがはっきり分かるのではないか」と語る映像は圧巻でした。

濱谷さんは最後に、94年に現行法が制定されたが、今なおこの調査が目的とした「受忍」政策をはねのけるにはいたっていない。それはなぜなのか、どうすればよいのか、この学習会シリーズをつうじて解き明かすことができたらと思う、と結びました。

参加者は院生・学生ら若い人たちを含む34名。前回参加者の呼びかけで新たな参加者があったのもうれしいことでした。

次回、4回目の学習懇談会は6月4日（土）13:30～16:30、プラザエフ5階会議室で。「『要求骨子』から『基本要約』へ＝国家補償論の発展をふり返る＝」をテーマに、栗原淑江さん（継承する会事務局）が問題提起をします。（詳細・申し込みについては、同封チラシをご参照ください）

（2）被爆70年「被爆者として言い残したいこと」調査

回答の集計作業がはじまり、中間報告・追加調査へ

被爆70年の夏に実施した「被爆者として言い残したいこと」調査の回答について、11名のボランティアによる入力作業が選択肢項目については終了し、4月23日（土）に集計、中間まとめと追加調査の具体化のための作業グループの打合せを行いました。

今後、調査回答の精査を行ったうえで本格的な集計作業を開始することになりますが、単純集計の結果からでも、おおむね次のような特徴が読みとれます。

● 被爆当時10代半ばだった被爆者の回答が多い。（最近まで運動を牽引してきた被団協運動の第二世代）

● 問「今とくに心にかかっていること」では、「日本がまた戦争する国になるのではないか」の回答数が「自分の健康」「子や孫の健康」をも上回りトップ。日本が戦争を起こすことへの危機感がつよい。

● 問「原爆の被害はがまん（受忍）できるか」については、「がまんできない」と回答した人が圧倒的（8割）だが、それが「原爆被害への国家補償」要求（5割強、「日本政府に求めること」の回答）に必ずしも結びついているとは言えない。

● 問「日本政府に求めること」では「実相普及」「核兵器廃絶」以上に「9条厳守・戦争によらない国づくり」の回答数が多い。

自由記述からも回答者の「怒り」が感じられる。これまで大変だったこと（差別、病気、忘れられないこと）に加えて、現在の日本の平和への危機感が色濃くあらわれている。調査の時期が、安保法案審議の時期に重なっていたこともあり、安保法案、9条への思い、アメリカ追従の外交への不満、のことばや、次代の人たちに政治に関心をもつようにというメッセージなどが目立っている。

5月中には自由記述項目の入力作業もほぼ終えて、10月の日本被団協結成60周年記念式典・祝賀会までに中間報告をまとめたいと考えています。

また、追加調査について「可」と答えてくださった方への聞き取りによる調査（当面は首都圏を中心に）を実施するため、連休明けに調査協力者と首都圏各被団協関係者を対象に、追加調査の趣旨・内容の説明を兼ねた打ち合わせを行う予定です。

3. 広報電子化部会

(1) 「継承活動に取り組む人々をつなぐプロジェクト（仮）」実施について

原爆被爆者の証言や被爆者運動の記録を収集・保存に取り組む「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」では、当会が運営する「継承ポータル」(<http://keishoportals.jp/>)、「継承ブログ」(<http://keishoblog.com/>)を、継承活動に取り組む方々をつなぎ、さらに多くの方へと発信していただける場にするため、「継承活動に取り組む人々をつなぐプロジェクト（仮）」を実施することにしました。

このプロジェクトは、全国各地にて継承活動に取り組む方々を当会が取材し、上記のWebサイトにてインタビューやレポート記事の形式で掲載していくものです。

つきましては、このプロジェクトに賛同、ボランティアスタッフとしてご協力いただける方を募集します。主な内容は以下の通りとなります。

● **ご協力内容**：継承活動に取り組む団体・個人へのインタビュー取材

● **場 所**：ご自身がお住まいの地域近隣

※当会との打ち合わせは東京都新宿区四谷の事務所にて行います

※初回の取材は関東近郊を予定しています。

● **時 期**：2016年4月以降

※必要経費として打ち合わせ、取材にかかる交通費をお支払いします。

※詳細は継承ブログおよび当会のウェブサイトをご覧ください。

戦後 71 年を迎え、被爆者の方々の高齢化がさらに進む中、継承する取り組みはさらにその歩みを急ぐことを求められています。全国にて取り組まれている活動がもっと多くの方に知られるだけでなく、活動同士がつながっていくことも、このプロジェクトを通じて実現したいことの一つです。ご興味をお持ちいただけの方は、ぜひお気軽にお問合せください。

● 問合せ：ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会事務局まで

■ 実施スケジュール

～2016. 5. 31 一次募集・選考

～2016. 6 月上旬 打ち合わせ

～2016. 6. 中旬 選考者取材

～2016. 7. 月上旬 記事掲載

4. 組織財政部会

(1) クラウドファンディングの取り組みのご報告

被爆者のさまざまな記録をインターネット上にデータベース化し、情報を発信していく「デジタル・アーカイブ」制作のプロジェクトをスタートさせるためのクラウドファンディングにご協力いただきありがとうございました。

クラウドファンディングで集まった金額は、目標額の 1 5 0 万円に対して 8 1 名の方から 1 5 2 万 3 千円、郵便振替でデジタル・アーカイブ制作費への募金として 1 7 名の方から 2 0 万 7 千円、合計で 1 7 3 万円となりました。

またクラウドファンディングページへの訪問者数は 2, 0 0 0 人を超え、3 9 1 の方が Facebook 「いいね！」をしてくださいました。

今回のクラウドファンディングでご支援いただいた資金にて、デジタル・アーカイブ制作の初期資金の目途を立てることができましたが、膨大な資料をオンライン上に公開していく上ではさらに 10 倍ほどの費用が想定されています。

下記口座にてご支援を募っておりますので、今後も引き続きご協力くださいますようお願い申し上げます。

【郵便振替口座】

記号番号 0 0 1 7 0 - 5 - 6 9 4 7 5 2

加入者名 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産基金

* 振込取扱票の通信欄に「〇〇〇円（デジタル・アーカイブ）」と明記してお振込みくださるようお願いいたします。

なお、アーカイブの制作については、今回の資金が入金される予定の7月以降に本格始動、その後随時「継承ブログ」等を通じて皆様へ状況をご報告してまいります。

Ⅲ. 各地の取り組み、関連企画から

(1) 【埼玉】被爆体験の継承の取り組みから

2016年4月22日

被爆体験聞き書き行動実行委員会
市川京子

被爆者には、被爆者であることを知られたくないために被爆者の会に入らない、被爆者と関わらないという方も多くいらっしゃいます。当実行委員会ではしらさぎ会（埼玉県原爆被害者協議会）の皆さんと様々な活動を共にして、被爆者の方の信頼を得られるよう働きかけ、話しても良いかなと思っただけのようにしています。初めて語る場合はいきなり大人数のところでは無理がありますので、当実行委員会が少人数で聞き手になっています。自分は仕事で大勢の人の前で話していたから、被爆体験も語れると思っただけの方も、つらいところではしばしば絶句してしまうことがあります。私たちはそれらすべてを受け止めて聞かせていただいています。

しらさぎ会では、被爆者が被爆体験を語る場合は、ある程度きちんと事実と思いが伝わるようにしたいということで、語り部の学習会を実施したり、一人ひとり語る内容やしゃべり方をいろいろ検討されています。

当実行委員会では被爆体験を証言集「8月の晴れた日に」に記録していますが、その中から朗読用に証言者といっしょに編集して、7月の原爆死没者慰霊式で朗読しています。一昨年までは一人の方の証言を朗読していましたが、昨年の被爆70年では被爆の実相をより理解してもらうため7人の方の体験を朗読しました。参加者、スタッフからとても良かったとの感想がありました。一人の方の体験より複数の方の体験を聞く方がより被爆の様子がイメージされ心に残るだろうということで、今年の慰霊式からは3人の方の体験を朗読することにしました。

当実行委員会の活動に関わっている者の中には、被爆体験を紙芝居に作成したり、いろんなところで紙芝居をしている人たちもいます。何も特別な準備の必要もなく、相手が子供でも大人でも、平和のテーマの集まりでなくても、いろんなところで（バスの中でも）伝えることができる、ハードルが低い伝え方ではないかと思います。朗読や紙芝居は、被爆についての予備知識がなくても、やりたいなと思えば、物さえ準備すればだれでもでき

るし、聞き手ではなく、読み手になることで、また受け止めも変わってくる、深まるということも考えられます。

いろんな話し方、聞き方、伝え方があると思います。これからも工夫しながら、今日の聞き手が明日の語り部となるよう活動していきたいと思っています。

【お問合せ】

コープネットグループ労働組合 TEL 048(839)1052(市川まで)

(2) 【東京】国際協力やキリスト教関係のグループと新たなつながり ～早稲田奉仕園で世界ヒバクシャ展～

NPO 法人世界ヒバクシャ展事務局
安在尚人

世界ヒバクシャ展の写真展などからなる「Yes Peace! 2016 平和の種をまこう！」が4月22日、レンガ造りの建築が新緑に映える早稲田奉仕園（東京都新宿区）で始まりました。

世界ヒバクシャ展は、6人の日本人写真家が撮影した、原爆、核実験、原発事故、劣化ウラン弾、ウラン鉱山などによる、ヒバクシャや核汚染の現場の写真を通じて、核のない平和な世界を願うヒバクシャの思いを伝えてきました。今回は、チェルノブイリ原発事故から30年となる4月26日をはさんで5月1日まで10日間の日程で、様々な分野の方々が、落ち着いた雰囲気の中、早稲田スコットホールギャラリーを訪れ、写真をじっくりご覧になっています。

私たちNPO法人世界ヒバクシャ展は、この世界ヒバクシャ展を2020年までに世界100カ国で開催するという目標を掲げています。そのためには、様々なネットワークを持つグループの協力が必要です。早稲田奉仕園は、キリスト教や国際協力NGOの拠点的な場所で、写真展にも、その関係の方たちが多く訪れ、今後のコラボについて様々な話をする事ができました。



若い人がなかなか来てくれないなと思っていましたが、昨日は東南アジアで国際協力に携わる大学生の3人組が来てくれました。この後に行くグループの勉強会で話してくれると言っていました。被爆者の体験を継承し、核兵器の廃絶に向けた平和運動を盛り上げるために、世界ヒバクシャ展も、日本の若者たちとどんどんつながっていけるような企画を生み出していきたいと思っています。

【お問合せ】NPO 法人世界ヒバクシャ展

T E L 080-3558-3369 / E mail hibakushaten@gmail.com

(3) 2015/12/19「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」での川崎哲さんの講演 (要旨) のご紹介

川崎 哲 氏 「ヒロシマ・ナガサキを伝えるということ」



今日私は、ピースボートや ICAN (核兵器廃絶国際キャンペーン) の活動を通じて国際的にヒロシマ・ナガサキのメッセージを発信することに関わっている立場から、「今日の世界の中でヒロシマ・ナガサキの声をどのように伝えられるのか」についてお話したいと思います。

1. 世界の核をめぐる情勢

ICAN は 2007 年につくられた国際的な NGO の連合体です。現在 90 カ国、420 を超える団体が参加しており、私はその執行部におります。

この数年の間に核兵器廃絶に関わる国際的に大きな動きがありました。

2013 年から 2014 年にかけて 3 回、核の非人道性に関する国際会議が開催され、そこでの被爆者の発言や議論を通して「核兵器は非人道的であって禁止が必要だ」「核兵器禁止条約を一緒につくろう」という機運が盛り上がってきました。



2015 年前半の NPT 再検討会議を経て、2015 年 10～11 月の国連総会第 1 委員会において「このように非人道的な核兵器を、どのように法的に規制していくか」に関して、「禁止に向って動こうと誓約する」「核のない世界のための法的措置について議論をする作業部会を来年国連に設置する」という二つの決議が出され、どちらも 130 前後の国々が賛成しました。日本は残念ながら棄権でした。

【写真】核の非人道性に関する国際会議(メキシコ会議)の被爆者セッションで発言するサーロー節子さん(カナダ在住 広島被爆)

この決議によって、作業部会をつくり 2016 年に会議を開いて議論をすることになりました。その報告は同年秋の国連総会に提出されます。つまり 2016 年には、これまでの 2 年

間にわたる核の非人道性に関する議論を、核兵器の禁止の議論に発展させる舞台がつくられます。

作業部会に多くの国が参加し、核兵器の禁止に向けた議論を進めてもらうことが大きな課題になります。

2. 世界でヒロシマ・ナガサキの体験を伝えていくこと

ピースボート「ヒバクシャ地球一周証言の航海」は2008年に始まり、過去8回で160人を超える被爆者が世界を訪問してきました。証言と併せて、政治家や政府の方々にも働きかけをしております。

この活動を通して感じてきたことをエピソードと共にご紹介します。

(1) 対話の重要性

5年前、シンガポールの高校で200人近い高校生を前に被爆証言をしました。話してくださったのは、在韓被爆者で、在韓被爆者の権利の問題に取り組んでこられた郭貴勲（カク・キフン）さんです。

この際、証言後の質問で高校生が「本当にご苦労なさいましたね。しかし、あなたは韓国人ですよ。原爆が落ちて良かったと思いませんか」と発言し、会場から笑い声に似た声がどっと出たんです。思い返せばシンガポールも1942年から1945年まで日本の支配下に置かれていた。あからさまな質問に周りの若者もちょっと笑ってしまった、そういう空気だったと思うんです。

その時に郭貴勲さんはこう答えたんです。「良かったと思いました。こんなにひどい目にあっただけでも、これで戦争が終わるし自分たちは解放される、その時はそう思った。だけど、その時自分の負った痛みだけではなく、周りの人たちがひどい目にあっている様子を数週間、数カ月と見ていく中で、こういうことは二度とあってはいけないんだと思うようになってきた」と。するとシンガポールの高校生たちも頷いてくれました。



「国籍に関係なく、原爆投下というものは許されないもの」という結論だけが題目として出されていたならば、高校生たちとはわかり合えない点もあったと思うんですね。こういう対話の中に、近年こんがらがってきている東アジアの歴史問題を紐解いていく過程があるのかなと感じました。

【写真】シンガポールの高校での被爆証言(2010年)

(2) 被ばくに対する国際的な認識と日本人の感覚とのズレ

二つ目のエピソードは、2011年1～2月に被爆者の皆さん、長崎の高校生などと一緒に太平洋のタヒチに行った時のことです。

タヒチ辺りでは200回近い核実験が行われました。科学者によると、周辺の環礁には穴がたくさん開いており、その穴の中に核実験の核物質が残っていて、その穴が崩壊するようなことがあると津波が発生して、放射性物質を伴った津波が島を襲ってくる危険性があるそうです。

そこで島民は被爆者たちに「仮に今、津波で放射能汚染が起きたら、どういうふう逃げたり解決すればよいのか。皆さんは経験があるからわかるだろう。それを教えてくれ」と言います。それは誰もわからないわけです。

その翌月、東日本大地震が起きて、津波が起きて、原発事故が起きましたが、こういう事態にどう対応すればよいかわからない。日本は被爆国と言いながら国全体、社会全体として被ばくに備えるという意識はありませんでした。

一方、国際会議で核の非人道性を議論する時には「今日使われたらどうなるか」とよく言われます。仮にインドとパキスタンの間で核戦争が起きた場合、両国で多数の死者、放射線被害が現れるのに限らず、核爆発に伴う塵や埃が大気圏を覆って気温低下や降水量減少をもたらし、世界中で10、20億人が飢餓に瀕するだろうと言われています。これは大変な問題だと思う反面、日本から来た者としては、「過去のことはどう活かせばよいのか」ということをいつも感じていました。



【写真】タヒチを訪れた被爆者と長崎の高校生(2011年)

日本の「過去をどう活かすか」に対して、核実験の被害をつい最近まで受けていたタヒチの島の人たちは「今後被爆したらどうしよう」と真剣に考えていた。私は両者の間に大きなズレを感じていて、この問題はまだ解けないでいるところなんです。

(3) 「継承者」に求められること

こうした活動をしながら私たちが大事にしているのは、若い世代の役割です。「ユース非核特使」と言っています。船の上や寄港地で、基本認識が違う国の人たちにどうすればヒロシマ・ナガサキを伝えていけるのか。理屈やロジックも必要だと思いますけれど、芸術的なことも必要です。

また、被爆の当事者ではない世代の人たちが何かを伝えていく際に、被爆者の話をそのままコピー&ペーストすることはできませんし、それを志向すべきでもありません。これからの世代は「被害を全体的に捉えること」「歴史的な文脈をきちんと理解して伝えられるようになっていくこと」「今日の核問題とのつながりを理解して話すこと」の三つが求められており、こうした方法論がつくられていくべきではないかと思っております。もちろん伝えるにはプレゼンテーション能力が必要ですが、そういうことに興味を持っている若い世代が増えていると思います。



【写真】若い人たちによる朗読劇の様子

3. 戦後 70 年を経て、ヒロシマ・ナガサキを伝えていくこと

(1) 「戦後 70 年」の意味

2014 年、軍縮大使の佐野さんの発言が批判されました。オーストリアで開かれた核の非人道性に関する国際会議の「核戦争では非人道的な被害が生れ、人道的な救援はしようがない」という議論の中で、あえて手を挙げて「救援が不可能だというのは悲観的過ぎる」と言ったのです。

軍縮議論では「救援がまったく不可能であるならば、そのようなものは非人道的で、手もつけられないから禁止すべきだ」という話になるんですが、佐野さんの発言は「仮に核戦争があったとしても救援はできるよ」という方向にあったことが大きな問題です。

確かに理屈では、救援はしたほうが良いに決まっている。ですが私自身がそう感じないのは、被爆者の方々とお付き合いをしてきたからだと思うんです。ほとんどの被爆者が証言の中で口を合わせたかのように、誰かしら見殺しにしてきた話をなさる。「本当に救いたくても救えなかった。そのことがあるから今、語っているんだ」と。こうした話を聞くと「救えるんだったら救いましょう」という言葉は出てこないんですよ。だから、やはり日本は「救えなかったということをどうするんですか」ということを問わなければならない。このような当たり前の精神をいかに伝えられるか。

佐野さんの発言は、彼の個人的な問題を越えて、戦後 70 年経って原爆体験が薄らぐどころか、本当に書物の世界のことになってしまっているのだと思うんです。70 年とはそういう時間です。

(2) 原点「ノーモア・ヒバクシャ ノーモア・ウォー」を見据えた取り組みの重要性

NPT 会議でも国連総会でも、中国政府が「ヒロシマ・ナガサキを言うんだったら南京はどうなるんだ」と日本の出す決議に反対するという動きが出ています。これは日中両政府

間の政治的なゲームの中のことですから、あまりに真面目に対応すべき話ではないと思うんです。

ですが、日本では「中国は何を言うか！我が日本はヒロシマ・ナガサキで…」との言論が出てきています。ヒロシマ・ナガサキというシンボルが、プチ・ナショナリズムを鼓舞するものとして使われる時代が、残念ながらこれから始まると思います。

今日会場にいらっしゃる皆さんは、「ヒロシマ・ナガサキを継承する」ということは、一方で「核兵器廃絶」であり、もう一方で「世界恒久平和」、すなわち「ノーモア・ヒバクシャ ノーモア・ウォー」と発信し続けてきました。この原点をもう一度、繰り返して言うていくことが大切です。「ヒロシマ・ナガサキのメッセージは、報復ではなく核兵器廃絶なんだよ。戦争は繰り返してはいけないんだよ」と。

政治情勢や政権の動き、政権に追随するメディアの動きもあり、その流れで日本がヒロシマ・ナガサキを語り始めてしまったら、先ほどのタヒチの話然り、シンガポールの話然り、世界に伝わるメッセージにはなっていないと思っております。

(終わり)

[文責：NPO法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会]

【主婦会館プラザエフ 案内図】

